



奥田弁次郎・フミ③ 地域史研究者 三善貞司

夫婦の情熱に外国のサーカス団も大熱演

明治の始め、千日前（現・中央区千日前1〜2丁目）の移転した墓地跡に、茶店と寄席よせを出した奥田弁次郎・フミ夫婦は、もっと千日前を繁盛させようと、夜店を出す計画を立てます。

「な、あかりを持つさかいに、あんた、千日前に夜店出せへんか」

フミは夫の香具師仲間たちに、声をかけて廻りました。当時の大阪では、夜店を出すのは船場のような一等地に限られています。

しかし、あかり（灯油代）を全部負担してもらえないのなら、話は別です。

「弁のおかみさんの頼みや。やつたるやないか」

夜店を仕切る親分が重い腰をあげてくれます。こうして死刑場まであった幽霊の出る恐ろしい千日前墓地跡の夜も、人々が集まるようになってきます。今ではネオンのきらめく不夜城のような歓楽街も、120年ほど前はこうだったのです。

フミは住居もかねた茶店の櫃かまち（玄関のあがりぐち）に、たらいのような大きいおひつ（ごはんを入れる器）を置き、茶碗と漬物皿を並べます。夫も自分も使用人も芸人も、いつでも手のあいたときに来て、勝手に好きなだけ食べれば良い仕組みです。たまには、めざしやみそ汁、たまごやきのつくときもあります。

「へえー、ご寮はん。今日はごきげんやな」

と誰もが喜んで、腹いっぱいかきこみました。食器はそのまま水を張った樽にほろりこみ、すぐに仕事場にとんでいけるのがこの工夫でした。

こうしてかなりのゼニをためこんだフミに、ある日弁次郎が声をかけました。

「なあ、もっと大きいことやれへんか」

なるほど元・大ぼら吹きのお達者だけあって、立て板に水とばかりに喋りまくる内容は、まことに氣宇壮大きうそつだい、まるで夢のような話ですが、いつもは寝言いわんときと背中をどやすフミも、じっくり耳を傾けます。夫の目の色がちがっていたからです。

明治30年（1897）弁次郎とフミ夫婦は、汗と涙の結晶を持って、なんとヨーロッパからアメリカに渡ります。英語のできぬ夫婦が、どこでどう交渉したのかはわかりませんが、ゴーチエ団やチャネリー曲馬団などの奇術やサーカスの一座を招いて、千日前で興行を開くことに成功します。

これらの一座は、ヨーロッパやアメリカでは、うらさびれた場末で興行する無名に近い芸人たちの集まりでした。しかし情報網が今とは比較にならない時代の話です。日本では

誰もそんなことは知りません。

「ヨーロッパから超一流のサーカス団がやってくる！」

と弁次郎が得意の大ぶろしきを広げて喋りまくりますと、皆その気になってくる。第一入場料が格安です。口車にのせられてはあさんまで死に土産に見とことやってきて、連日満員となります。

また一座にしても日本の実情にはうとい。夫婦の言葉を真に受けて、

「ジャパンの大プロモーター、ベン・フミ興行会社の招聘だ」

と信じこんでしまいます。フミはそんな彼らを、

「あんたらの芸は世界に通用する。目の肥えた私の言つことやさかい、まちがいおまへん。さ、がんばりなはれ」

とおだてあげますから、ドサ廻りの苦勞を重ねただけに大感激、汗水たらして熱演します。

「男も女も年寄りも関係あらへん。芸歴なんてどうでもええ。一番客をわかせた芸人さんに、ギヤラをはずみまつせ」

とのフミの方針も異国の人たちのハートにひびき、興行は大当たりで幕となります。

フミは人情味の厚い女性でした。尽くしてくれた芸人さんの面倒を、とことん見ます。

酒や道楽に金を捨てる芸人には、

「あんた、金はためるもんや。ためたらかならず子を生む。生むようになってから、使いなはれ」

と諭し、母親代わりも務めます。

こんな話もあります。氷雨ひこめの降る真冬の夜ふけ、フミの家の軒先にずぶぬれになった若い男女が雨宿りをしているのに気づきました。

「どないした。ま、入りなはれ」

と招き入れ、火鉢にあたらせ熱い茶などだしますと、なにも喋らずとんがっていた二人が、わあっと泣きだしました。和歌山のいなからいなから駆落ちし、あてもなく大阪へ流れ着いたと言うのです。フミも親の猛反対を押しきって18歳のとき、ほら吹き男の弁次郎と駆落ちしたのが人生の始まりです。

「しばらくうちにいなはれ。なんとかしたげるさかい……」

フミはあたたかい客用のふとんを敷いてあげました。のちに二人は、へえー、あの人がなあ……と言われるほどの芸能人になったそうですが、彼女の人柄に心が打たれますね。



現在の千日前

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッシュンビジネス・御堂筋新聞